

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成27年 8月 第174号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

地域包括ケアへの途を拓く為に

— 24時間定時巡回随時訪問の開始を目指して —

生物の多くは『種の保存』の為に『群生』をします。その中で、人間の『群』のみが『社会』に変化し、発展して来ました。

人間と他の動物との決定的な違いは、『老いた命を集団の中で看取る』処です。人に最も近いとされる猿も、老いて死期を悟ると群を離れ土に還ります。人は死期を悟ると仲間に身を任せ、全てを委ねます。

そしてもう一つの違いは、生殖機能を失って後も相当に長く生きる処です。他の動物は、遺伝子を伝え終わると、その後長くは生きていません。典型的なのは『鮭』です。子の養育期間が長い哺乳類も、排卵や生殖の機能を失うと死期を悟ります。人間は、50才前後で排卵機能を失った女性が、その後30年～40年を生きるのです。男性も其れに近い年齢まで生きる時代です。

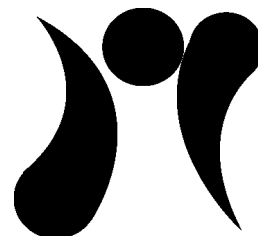
人間は、『老いて死と向き合う暮らし』を通して『社会』を引継いで来た、と考えられます。生物として引継ぐ遺伝子情報と共に、老いて死と向き合い、QOLを問い、思想を確立して引継ぎ、文化や文明を築き、変化・発展し得る社会を創り上げたのです。

今の日本は、『超高齢』=多くの人の老いと死に向き合いながら、『超少子』=子を産まない人が増える、という超アンバランスな社会が40年以上も続き、存続が危ぶまれます。社会を引継ぐ為に必要な『QOLを問い思想を確立する過程』が抜け落ちていた、と考えざるを得ません。

そして今、『地域包括ケアシステム』を構築し、社会を引継ぐ途を探ります。地域の中で『老いて死と向き合い』『QOLを問い』『思想を確立する』営みを支える仕組みを創らねばなりません。

まず第一歩として、老いて要介護になり、認知症になり、死が間近に迫る人が、『主役として暮らす街』が必要です。入院でもなく、入所でもなく、共に地域の住人として、老いて死と向き合いながら、『可能な限り』ではなく、最期まで

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

『街で暮らす』のです。人は、日常の暮らしの中で死と出会い、心の中でQOLを問い、苦悩と葛藤の中で思想を創ります。

最近、特養やグループホームで看取る場面も増えて来ましたが、世間との縁が薄い施設入所中の出来事と受け取られてしまい、地域の一員が主役として迎える最期に相応しい余韻が、地域の中に残りません。

まずは、特養やグループホームでの看取りを、自らの居住空間で自らの人生を締め括る、主役としての営みを支える取組みとして拡げたい、と考えます。ケアハウスせいりょう園30室、リバティかこがわ20室、自愛の家さくら24室。全て、バス・トイレ・キッチン付きワンルームタイプの、居住空間としての要件を十分に備えた賃貸住宅です。

現に運営している訪問介護と訪問看護を『24時間定時巡回・随時訪問の介護・看護サービス』に拡大し、定員25人の小規模多機能ホーム『輝きの家ながすな』と連携して、賃貸住宅74室に居住されるお年寄りを、人生の主役として最期まで支えたいと考えます。其処には、特養50人、ショート20人、グループホーム22人と併せて、24時間を通して介護を提供して暮らしを支える小さな街、『せいりょう園コミュニティ』が出来上がります。

其処での経験を踏まえて、介護者の意識と地域社会の常識を変革し、エリアを野口町に拡大して展開する途を拓き、『地域サポート型特養』として、地域包括ケアシステムの中核的な拠点となる使命を果たしたい、と願います。

主役としての誇りをもって人生の最終章を生きる人と、その誇りに応えるに相応しい思想と人間性と社会性を備えて介護に携る人と、共に社会の変革を担い、次の世代に明るい未来を築く、地域包括ケアシステムの主役です。

明るい未来を築く為の第一歩を踏み出す仲間として、『せいりょう園コミュニティ』の住人として暮らすご希望の方を、そして、介護に携って働くご希望の方を、広く募集します。

せいりょう園 渋谷 哲

8月の俳句・短歌

・揃い浴衣に思いいろいろ 金踊

・原爆忌 戦火くぐれど今日ある幸

・扇風機とコタツと同居 熱帯夜

・ハイビスカス ハワイの事を言いたげな

・真夏日を銀色に弾ね整然と

蒼かれし屋根を亡父に見せたき

・演台に水苔にくるみし風らんの
純白匂ふ真夏日の受講

黒田 操氏

松澤 正枝氏



グループホーム職員より



介護職員 長谷川展子

私が、せいりょう園グループホームに入職して早、六年が経ちました。以前、他施設の特別養護老人ホームで介護職としての経験はありましたが、プランクが長く、配属先が今まで経験した事のないグループホームという事で、「うまく介護ができるのか・・・。」という不安がありました。

入職したての頃、頼れる人が居ない中で保育園児を2人抱えていました。その為、子供の急な体調不良での欠勤や入院付添の為の長期欠勤、保育園からのお迎え電話などで月に何度となく仕事に穴をあけてしまいました。その度に他の職員に迷惑をかけ、申し訳ない気持ちでいっぱいになり、何度「辞めようか・・・。」と悩んだか数えきれません。しかし、私が出勤すると主任をはじめ他のグループホーム職員も嫌な顔一つせず、子供の心配までしてくれて支えられ、ここまで働くことが出来ました。

グループホームは、個別ケアで一人一人の入居者の生活リズムに合わせ、「その方々の生活を支えていかなくては・・・。」と頭では分かっている、声かけやタイミングが画一的になってしまう時があったり、入居者が自由に外へ出られ、見守る距離感を保つことが苦手で距離を詰め過ぎることが多く、何年経っても慣れないなあと感じています。

グループホームに所属して数ヶ月が経った頃、初めて看取りを経験しました。人の死に初めて直面して、恐怖心とパニックで何も出来ない私でしたが先輩職員は冷静に対処され「すごい。」と思ったのと同時に「私には看取りは無理。この仕事辞めようかな・・・。」と悩んだことを、今でもはっきり覚えています。しかし、当時の主任に励まされ「もう少し頑張ってみよう。」と気持ちが変わっていきました。あれから何度か看取りを経験して、その度に「前回の私よりは冷静に対処できたのか・・・。」と不安になりながら、私もいつかは、あの時の先輩職員のようになれるよう頑張っていきたいと思います。

今年の四月から正規職員となりました。非常勤職員の頃よりも、急な欠勤や仕事上の事で沢山悩み葛藤していくと思いますが、一人前の職員となっていけたらと改めて思いました。



～ 流しそうめん ～

グループホームとデイサービスでは、若竹の中をくりぬいて、流しそうめんを行いました。準備していたそうめんは、みんなで一齐に箸を出した為、あっという間に無くなってしまいました。

夏の風情を感じた“ヒトトキ”でした。

Kさんの看取りについて

小規模多機能 介護職員 吉岡陽子

Kさん（女性）は平成14年1月に、リバティかこがわに入居され、せいりょう園で老年期の自立した生活を営まれました。小規模多機能「輝きの家 ながすな」が平成21年に立ち上がった時からの登録利用者です。

私が小規模多機能に配属になり、介護職として勤務させて頂くようになった頃Kさんは、移乗や移動、入浴、排泄以外は自立されており、入浴以外の時は、ほとんど居室で生活を送られていました。薬剤師でもあったKさんは、自分の体調を薬で自己管理されており、枕元を中心に手の届く範囲内に多種多様の薬や必要物品が置かれていました。又、自分の力で端座位に成れる様にタオルをベッド柵に掛けて、そのタオルを引きながら身体を起こしていました。自分で自由に食品が取りだせる様、ベッドの^{きわ}際に冷蔵庫の扉が内側になる様配置する等、出来る事は自分で出来る様に生活動線をひかれていました。この時、102歳を既に迎えられていましたが、自分の意志をはっきりと持ち、それを外へきちんと伝える事が出来る「本当に凄い方だな」と感じました。

そんなKさんが、去年の暮れ頃から下腹部の鈍痛をきっかけに身体中の痛み・だるさを訴えられ、医師である息子呼んで来て欲しい、そして息子に診察して貰いたいと何度も訴えてきました。主治医の先生は別におられ、これまでの終末期に向けての話し合いでは、主治医の指示のもとに終末期の医療ケアを行っていくという事でしたので、私達は訴えに戸惑いました。



平成27年7月16日(木)～17日(金)

近畿老人福祉施設研究協議会
兵庫・神戸大会
～認知症ケアサミット・
イン・KOBÉ～



この日は台風接近中の為、参加者は少なめでしたが、第1分科会「居住環境・生活空間を考える」の分野で、グループホームの介護主任が実践発表を行いました。

発表テーマは「その人らしい生活と生き方に向かい合うチームケア」です。

『伝えたい想い』を言葉にすることは、とても難しいです。しかし、発信していかなければ何も伝わりません。良い経験をさせて頂きました。

今後も、発信する場があれば、積極的に参加していきたいと思っています。

しかし、よく面会に来ていたキーパーソンの娘さんを通じて、本人の意志が息子さんに伝えられました。息子さんが来て点滴を行う様になりました。痛みを訴え続け、その都度薬を希望するKさんを見て、多量の鎮痛剤を持ち込まれました。一時期、指示系統が2つになり、どちらの指示に従えばよいか?と混乱した時もありましたが何度も家族と話し合った結果、最後は、本人と家族の意向に添うような形となりました。

薬に関しては、複数の鎮痛剤を短時間の間隔で使用するという通常概念からはなれた服用となりましたが、それも薬剤師であり、薬の服用は生活の一部であった本人の意志を尊重した痛みの緩和ケアの1つと考えました。

ほどなくして、Kさんの痛みに対しての具体的な訴えは無くなりましたが、こらえようがない時に「頼む。助けて。」と廊下の方まで聞こえるような声で訴えが続きました。やがてその訴えも日にちが経つごとに少なくなり眠っている事が多くなりました。そして平成27年2月21日午前4時20分、Kさんは104歳という長い生涯を終えられました。

亡くなる前日まで、数日の間泊まっていた娘さんが、Kさんの様子を見て、家族と相談して一旦帰宅して、Kさんが永眠された時は、傍に居る事が出来ませんでした。最初、その事が私達としても心残りではあったのですが、後日「母らしい旅立ち方と思っています。あの時、帰室する時に、母が『あなた帰りなさい。お疲れ様。』と背中を押して言ってくれている様にみえたので帰宅しました。心残りはないですよ。」と言って頂きました。

Kさんのターミナルケアに関わりながら改めて家族の絆、そして親が子を想う気持ち、又子が親を想う気持ちの強さを感じる事が出来ました。そして何よりも本人の尊厳を保持し、本人や家族の立場に立って誠実に業務を行う事の難しさと同時に、この職の奥深さを感じる事が出来ました。これからも介護職として成長していきたいです。

【せいりょう園待機者状況 平成27年8月14日現在】

○入所判定済み者 326人（グループの内）

Iグループ…98名 IIグループ…112名 IIIグループ…100名

【平成27年3月末迄の判定】

65点以上...13名 80点以上... 1名 90点以上... 2名

【平成27年4月1日以降の判定】

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を評価して分けています。Iグループが最も緊急性の高いグループとなっています。

判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。

平成27年4月より、県の「入所判定マニュアル」の制度が変わりました。

100点満点中、点数の高い方が入所対象となります。但し、直接本人・家族に話を聞いて、入所の緊急性を判断します。要介護1または2で、点数が65点以下の方は「非該当」となります。但し、介護の必要性・在宅介護の困難性が高い場合には、特列入所の必要性が高いと判断します。

特養待機者様の状況伺いについて

平成27年3月末までにお申込みいただいている方へ、ご本人の状況の伺いについてのお手紙をお送り致しました。伺いした内容につきましては、緊急性の有無などの参考にさせていただきます。誠にありがとうございました。

平成27年7月15日(水)花こま「猿まわし」



芸事を始めたばかりの、幼な猿の哲平くん。



これから芸に磨きをかけていく若猿の一平くん。



無病息災を祈り、獅子頭に噛んでもらう。



拍子に合わせて舞を披露。

お猿さんの芸事は、生まれて半年後くらいから稽古が始まるそうです。幼少期から稽古が始まる日本の伝統芸能と何となく似ているような気がします。芸を教える人間との信頼関係を築いているからこそ、舞台では息の合った芸が披露され、見ている観客にも想いが伝わり自然と笑顔になり、拍手が起こります。

毎年この時期には、花こまさんに様々な催事で場を盛り上げて頂いています。

【せいりょう園空き情報 平成27年8月19日現在】

- ① ケアハウス：3室（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：5室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

【問合せ先】 せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

平成27年7月26日(日)第30回せいりょう園納涼盆踊り大会



利用者・家族・ボランティア・地域の方々が沢山集い、例年通りに賑わいました。



今年は、「ようかい体操第一」を披露。地域の子供達等の協力もあって、和やかに盛り上がりました。

この日の日中は、気温が35℃近くと暑かったのですが、夕方になると日が陰り、心地よい風が吹き始めてきました。

今年は何人かの女性職員が浴衣を着ていた為、華やかな雰囲気となりました。

毎年、盆踊り開催時は、天気に恵まれています。今年も、ボランティアの皆さん等の協力を得て、思い出深く夏祭りを終えることが出来ました。

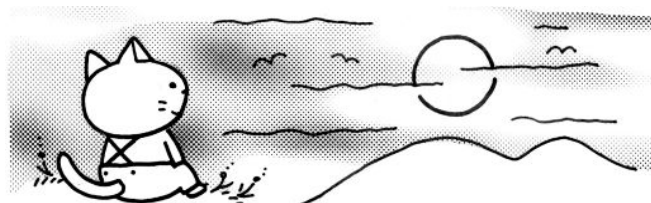


厨房だより

管理栄養士 田村愛弓

8月は中旬に暑さのピークを迎え、徐々にではありますが朝涼しくなってきました。少しずつ季節が移り変わってきているのが肌で感じられます。もう少しで9月に入りますが、皆様9月の行事「十五夜」を家でされたことはあるでしょうか。「十五夜」は、月を見ながら団子を食べる行事というのをご存じでしょう。事実そのような行事なのですが、大切な意味が込められた行事なのです。昔の人は、月の満ち欠けの様子や作物が月の周期に沿って成長することから、「農作物の収穫」「ものごとの結実」「祖先とのつながり」を月から連想しました。これらに感謝し祈るようになったのが十五夜のはじまりです。月見団子も元はその年の穀物の収穫に感謝を表し、これからの収穫に祈るということで米の団子を用意し月にお供えたのが由来です。

私たち現代人は、昔のように季節ごとの雰囲気・風流を楽しむ機会が減っています。十五夜の夜にはほんの一時でも日常の喧騒から離れ、ゆっくりとお月見を楽しまれてはいかがでしょうか。部屋の明かりを落としてほのかな明かりの中、窓辺で月を愛でながらお食事を楽しむのもおすすめです。これからの生活への実りを祈りながら、ぜひ一度十五夜を体験してみてください。(2015年の十五夜日程：9月27日、*満月は28日)



せいりょう園創立30周年記念特別企画

國森康弘氏『みとりびと一写真と講演』

2015年11月27日（金）午後1時～3時
加古川市総合福祉会館2階大ホール

國森康弘氏の『いのちつぐ「みとりびと」』は、死と向き合って生きて尽きる命と、看取る人々を映した写真集です。

『老いて死と向き合いながら生きる親と向き合う家族、千年に一度の津波に吞まれて逝った命と向き合う家族、難病で死と向き合う幼い命と向き合う親たち、生れて30分で寿命が尽きる命と向き合う親たち。』

1985年10月1日に特別養護老人ホームせいりょう園は定員50人で開設しました。以来30年間、特養だけで340人を超える方々を看取る場となり、今ではケアハウス、グループホーム、高齢者住宅においても、多くの方々の最期に寄り添い、看取りのお手伝いをしています。

老いて要介護になり認知症になって尚、ベストを尽くして懸命に生きるお年寄り。間近に迫る死を予期しながらも、『充実した命の営み』を他者に委ねて、『主役』として穏やかに締め括る人生。その死後には、多くの貴重な『余韻』を置き土産として家族や介護者に残します。

人間社会は、野生動物の『群』とは違い、思想や宗教を生み、科学や芸術を育み、文化や文明を創って進化・発展し、歴史を続けて来ました。その文化・文明の礎が、『老いの暮らし』と『看取りの営み』に潜んでいる、と感じます。『老いと死』は、遺伝子では引継げない、人間のみが持つ『精神的な営み』の成果を映し出す、『主役としての集大成』です。

科学・医学の進歩に伴い老いと死は『予防と克服』の対象となり、健康長寿を目標として高齢者の大半が病院での治療を優先し、結果として8割近くの方が病院で最期を迎えます。その結果現在では、日常の生活空間で死と向き合う場面が少なくなり、『主役不在』で精神的な葛藤が希薄になって、置き土産としての『余韻が残らぬ死』が増えているように感じます。

老いて病気や障害や死と向き合う命も、生れながらに病気・障害・死と向き合う子らも、共に『人生の主役』として支え、その病気・障害・死と向き合う葛藤の中で、思想や宗教心を深める社会でありたい、と願います。

是非多くの皆様にご覧頂きたいと願ひ、謹んでご案内致します。

2015年8月

社会福祉法人はりま福祉会
せいりょう園